

神のなさることは、
すべて時になつて美しい。

(伝道者の書3章11節)



よし まち よし こ
絵画制作 **由町佳子さん**

青森県・平川めぐみ教会員

聖書に「すべてのことには定まった時期があり、天の下のすべての営みに時がある。」(伝道者の書3・1)とあります。

由町佳子さんは、自分が受けたイエス様からの喜びを絵画制作を通じて分かち合っています。青森県平川市の平川めぐみ教会に行つて、中西ペニー宣教師と出会つたことがきっかけとなり、人生が一変しました。八方塞がりの中、泣きながら「誰か私を助けて！」と叫んでいた時、思いもよらない答えが次々と与えられるようになったのです。この恵みを共に分かち合うためインタビューに応えてくださいました。



絵を通じて神様が語られる

教会で制作されたポストカードをいくつか見せていただきました。これを作られた経緯をお聞かせてくださるでしょうか。

最初の絵は、ペニー先生がやっていたいよっておっしゃってくださって掲示板に貼るような案内のものからスタートしたんですね。その後、新しい教会の壁を絵で飾れたらという話から、しばらく描いていかなかった本格的な絵を描いてみることになりました。

そうすると皆さん本当に喜んでくださって、「あなたの絵からすごい情熱、力を私は感じる」って言うていただいたりしました。女の子がイエス様と抱き合っている絵もあるんですけど、別の友人は「涙が止まらなかつた」とか言ってくれて、私が描く小さな絵一つですら神様が用いてくださって働かれるんだなって思っ、すごく

うれしかったですし、私自身がすごく感じるものがありました。

これは神様に与えられた賜物なんじゃないのかって思った時に、使命的な感覚で、すごい勢いで描いたのは覚えてます。

教会に飾るだけではもったいないし、ポストカードにすれば誰かにあげることもできるからと言われて、じゃあちよつと試しに作ってみようかと作ってみました。

また、教会では年間の御言葉のテーマを頂いて描いたりもしています。

子どもの頃から絵に親しんでおられたそうですが、絵の道に進まれたんでしょうか。

絵は好きだったんですけど、イラストレーターや絵本作家になりたいなと思っ、ていても、なかなか実行するところまではいきませんでした。東京都の高校に通ってた

んですけど、絵を学んだのは「造形美術」っていうコース生で学んだその3年間だけです。

父がその時、ちよつと大きな手術を受けたということと、あとは絵の世界で食べていけるのかとか、ほかの人と自分を比較して実力はどうかとか、なんか自分の中でよく分からなくなつちやつたんです。それで、絵とはちよつと違う道に行つてみよう、今まで自分が目を向けてない方に歩んでみようと思っ、ていました。

学校を卒業後、地元に戻つて来られて、お母さんの世話をされたと聞きました。

二十代の中頃の時に、母の咳が止まらなかつたんですよ。母はすごい我慢強い人で、「大丈夫、大丈夫」って言いながら内職してたんですよ。私もその時はスパーマーケットでパートタイマーとして働いていたので、仕事に行く前に内職手伝つてっ、ていう毎日だ

ったんです。そんな中で母が最寄りの病院で検査したところ悪性のガンが見つかつて、母は弘前の大聖病院に行くことになりました。

当時の家族構成のことも教えていただきたいのですが。

父と母と私と妹。妹は10歳年が離れています。

その時は大工の父にも仕事か幾分かあつて、青森でもリフォームとかの請負があつたので良かったんです。母の抗がん剤治療の前が高額の医療費がかかるということ、父も本当に大変だったんです。抱えてるものの重荷に耐えられないで、飲酒量が増え、体も思うように動かないし、仕事もやつぱりなかなか探せない。家族にのしかかるさまさまな重圧の中で、母も、「もう限界、もう無理だわ」っていうことで、両親は離婚することになりました。離婚の届けを私が役所に取りに行つて、提出も私をしました。



その後のお母さんとの生活はど
ういうふうになったんですか？

市役所の保護課にすぐに事情を話したら、「すぐにアパートを探しに行きましょうか」って担当の人が言ってくださって、「もうここにします」ってすぐ決めて、運べる分の荷物を自転車で連んで引っ越しました。その時、母は入院していたので、病院に行く、仕事に行く、家のこと、妹のこと、もうグルグルグルグルっていうそういう毎日でしたね。何がなんだか分からない感じでした。

アパートに行つたはいいんですけど、本当に何も無い状態で、必要な電化製品もなくて……。母は入院してるから全部私がやらなきゃいけないわけですよ。

大家さんが情のあるいい方で、私は何も言っていないのにもかかわらず、まだ荷をほどいてる時に来てくださって、「冷蔵庫ある？」「ガスコンロある？」って聞いてくだ

「誰か私を助けて！」と叫んだ日

さって、「何にもありません。全く何もないんです。何もできません」って言ったら、軽トラックから、「これ、うちでもう使わないものだからいいよ。あげるよ」って言って置いてってくれたんですね。何にも無い無一文状態で家を出てきて、生活保護の受理がされるまで手持ちにあるものでしか何もできない中で、パート先の方に食べ物あるよって持たせてもらったりとか。

家電の修理が必要になった時もお隣の方が、親切な電器屋さんを紹介してくださって、後に引っ越すときもその電器屋さんが必要な物を世話してくださったり、引っ越しも全部手伝ってくださいました。その電器屋さんが後の主人なんです。本当にお金はない中でも、人にはいつも恵まれていました。

母のために毎日病院に行つてあげたい。それで薬も飲むのでお水

も必要だから、いつもミネラルウォーターを持って行つてたんです。だけど車の免許がその時なかったの、お金がない時は自転車で行つて、ある時はお金をかき集めて電車で行つてたんですけど、それでもやっぱり限界があつて、体ももう限界。くたくたで、妹も高校生だったから、自分で家のこともやらなきゃいけない。母のこともやらなきゃいけない。かなりすり減つてしまつて……。」「もう無理、私これ以上無理、誰か助けて！」って泣き叫んで。本当に叫んだんですよ。

その時、パートで働いていたホームセンターに一人の女性が来られて、「あなたのこと私ずっと見てたよ。知ってるよ。あなた、どこどこスーパーですつとレジしてたよね。それで、すごい一生懸命働く子だつてずつと思つて、今、正社員を募集しようと思つてたん

だけど、うちに来て働かないか」
つておっしゃったんですよ。

ホームセンターの店長さんに「こういうふうに通つてくださる方が来られたんですけど、私、どうしたらいいですか」って話をしたら、「ここでは君の代わりはいくらでもいるけども、その人の話では、あなたが欲しいと言ってるんだから、そっちに行きなさい」って背中押してくださって、「有給もみんな使つてけ」って至れり尽くせりて本当によくしていただいて、それでそっちの会社に正社員として入社しました。

大変な中でも、素晴らしい出会いが度々あつたんですね。お父さんとの再会について話していただけますか。

私は小さい時から父にくつついて、仕事の現場で一生懸命、汗水垂らして働いている父の姿を見ているので、ずつと心の中では父の安否を考えていました。会いたい

再会の時が計画されていた

なーっていうこともあるし、何してるのかな、どうしてるのかな、元気にしてるのかなって、ずっと思っていたんです。

上の娘がペニー先生に英語を習いに通っていて、私たちの住んでいる家からペニー先生のところまで距離があって、ある時、早めに出たので近くのショッピングセンターに行って、子供服売り場に行こうとしたんです。広い通路

にあるベンチに一人の年輩の男性が座ってて、娘たちが「あのおじいちゃん、なんか寂しそうだね。ね？お母さん」て言ったんです

よ。それで私もその人を見た時に、それがすごくうなだれている父だったの、びっくりしたんです。まっすぐ父を見ることができなくて、声をかけようか、どうしようかなっていう迷いがあったんですけど、その時に、心の中で「行

っておいで」みたいな、そんな感じの何かがあったんです。行かないといけないって。父の足元に膝を付いて「お父さん」って声をかけたら父が顔を上げて「佳子か」ってびっくりしてたんですよ。

娘たちの英語の時間が差し迫ってきたので、「いつだったらいい？遊びに行ってもいい？」って聞いて、「いつでもいいよ」って言うてくれました。結婚したっていうことも父は知らなかったし、孫が二人いるっていうのも、その再会で分かったの、これは家族みんなで行かなきゃいけないなと思って、「主人の都合のいい時間に行くよ」っていう話をして、それで家に行きました。

短い手紙だったんですけど、なんかすごいグツとくるものがあった。10年間すごい寂しい思いをさせてしまったんだなっていう後悔と、会えて良かったなーっていう気持ちと。父に会った時には私もイエス様を知っていたので、この出会いも全部与えてもらったんだなっていうふうに思いました。

父とは、許し許される、そういう時間が10年間必要だったんだねっていう話はしましたね。私たちが家に入出入りするようになってからは、ずっと手を振ってくれたりとか、ことあるごとに「ありがとう」と言うような感じで、もうそういう父じゃなかったから、本当に変えられてるなーって思っていました。

佳子さんが教会に行かれたのは、どういつきっかけでしたか。

上の娘が話すのが遅い子で、3歳半検診の時に、「ちょっと言葉が遅いですけど、そういう教育機



家族と

その後、だんだんと弱ってきた父を毎日家に訪ねていましたが、父が、私に手紙をよこしたんです。「お前たちに会うまではただ生かされている毎日だった。でも今は生きたいって思う毎日になった。本当に感謝してる。ありがとう。」



「小さな絵でも神様が用いて、見る人に語ってくださいます」



礼拝で賛美する
由町さん



教会の皆さんと。後列左から4人目が中西ペニー先生



教会で制作したイースターの飾り付けの前で

関みたいなどころを紹介しましよ
うか」と言われましたが、「もう
ちょっと様子見ます」って言って、
やり過ごしてたんです。
その娘がEテレの「えいごであ
そぼ」っていう番組を見るのがす
ごい好きで、それをいつも見てい
たんです。テレビで見てただけの
娘がある日、指をさして「これや
りたい」と言ったんです。娘から
そういう意思表示をしたのは初め
てでしたから、これはぜひやらせ
てあげたいと思って、「ネイティ
ブスピーカー 英語」って検索す
ると、一番上に「ペニーズイン
グ リッシュクラス」って出たんです
よ。検索した画面からペニー先生
の顔を見て、この人だと思って、
私、アポイントも取らないでその
まま行っちゃったんです。
ペニー先生が「ハイ」と言っ
て出てきてくれて、「年長からだ
けど、4月になったらまた電話す
るから待っててください」って。
それで4歳から通うようになった

のです。

通い始めて2か月くらいたった頃、ペニー先生が「オーストラリアの方が1か月間教会に来るよ」っておっしゃって、ホームステイ先を探しておられたので、主人に話して手を挙げました。サンディアさんというクリスチャンの方で、彼女が1か月うちにくれることになったのですが、彼女と接することで教えられたことがすごくいっぱいありました。

ホームステイの間、彼女は日曜日には必ず礼拝に行くので、私は送り迎えするために初めて教会の礼拝に出席しました。礼拝では、ペニー先生のメッセージに毎回心が軽くなるような、そんな感覚があった、今日も行ってよかったなーって。それから、ホームステイは終わっても、娘たちを連れて続けて行くようになりました。

クリスチャンって、それぞれ大変なこときつとあるんだろうけど、見ていてとにかく生き生きし

てる、なんでこんなに生き生きしてるんだろうって思ったんですね。

私はそれまでいっぱい本当に頑張ってきた、頑張ってきたから与えられるものがいっぱいあるって思ってたんです。自分が努力したからなし得たものとか、自分がある程度才能があるから賞をもらうとか、世の中はそういうことでしよう、って思ってたんです。ところが、教会に通うようになってクリスチャンの方たちと接することが増えていくと、今までの自分の感覚と何か噛み合わないものを感じ始めました。それで、余計にメッセージに真剣に耳を傾けるようになりました。

ある時、初めてクリスチャンの葬儀に参列して、なんだこれって思ったんですよ。なんでみんなだ歌ってるの？なんでこんなに明るいんだろうって思って。そしてペニー先生が、「天に召されるって私たちにとつてすごい喜びなんだ」っていう話をされて、死ぬ

ことが喜びって何言ってるんだろう

って最初思ったんです。でも、「私たちはイエス様を信じると、天におられる父なる神様からそこに行けるっていうパスポートをもらえる。それを持つてるから、もう天に行くってことは天のお父さんと会えるっていうことなんだよ」って。もうなんの痛みもない、苦しみもない、何もそういうものがない、美しいところで、永遠の命が得られるということなんだよってという話をしてくださりました。

それから、その後で父の葬儀もありました。悲しくうなだれている時にも、教会の方たちに話すと、「祈ってるからね」と言ってくださいました。祈られていることで支えられて、暗い心の奥底にある平安を体験して、私も死ぬんだったらクリスチャンとして死にたいなって思ってたんです。

その後で主人に「バプテスマ受けたいです」って話したら、「佳子はそうなると思ってたよ」って

言ってくれたんですよ。

「神のなさることは、すべて時にならって美しい。」(伝道者の書3:11)という聖書の言葉があります。が、私はずっと神様に背を向けていたにもかかわらず、私の「助けて」っていう言葉一つで、神様はもうずっと見放さない、ずっと見守り続けてくださっていました。人生っていいことばっかりじゃないし、つらいこともあるし、自分の思いどおりにいかないことはいっぱいあるんですけど、それは人間の考えている範囲であって、もっともっと大きい大いなる方、神様は全部知っておられて、人生のどこかで必ず今だよって、「その時」を見せてくださる。それに気付けたというのは、本当に幸せなことだと実感しています。

今日はありがとうございました。

(取材 中坊久行)